

平成 13 年 11 月 15 日

## 「雑司が谷物語－聞き書き・前島郁子ひと筋の道－」発刊 大正・昭和・平成…その囚われない心の軌跡を紡ぐ

1980 年代に雑司が谷旧宣教師館保存運動の中心メンバーとして、また東京駅赤レンガ駅舎の保存運動の代表委員として活動し、その後も地域誌の発行、市民による戦争犠牲者の追悼会など、様々な市民運動に一主婦の立場から取り組み続けている前島郁子さんの人生の軌跡を綴った本が刊行された。本のタイトルは「雑司が谷物語」、前島さんに話を聞き、「聞き書き」というスタイルで一冊の本にまとめた著者、今井洋子さんもまたひとりの主婦である。

著者の今井さんと前島さんとの出会いは 1997 年秋。「あんふぁんて・としま」という子育て中の女性グループが企画した講座に今井さんが参加、その時講師を務めたのが前島さんだった。講座の趣旨は、主婦として様々な市民運動に取り組んできた前島さんの体験を聞くというもので、会場は前島さんの住まいの隣、前島さん自身がその保存運動に大きく関わった雑司が谷旧宣教師館だった。

前島さんとの出会いを今井さんはこう記している。「やわらかい物腰の、この 1920 (大正 9) 年生まれの女性に、洋館を保存する運動を起こしたり、『わがまち雑司が谷』という地域誌を発行したりするパワーがあるとは、にわかに信じがたい気がした」…当時、専業主婦という立場に居心地の悪さを感じていた今井さん自身でさえ、「いい育ちのいい家の奥様」は家庭に収まって家事育児に勤しんでいるものとの先入観に囚われていたという。そうした先入観を破る人物とのこの出会いは、今井さんにとって少なからず衝撃的なものだった。特に、公務員である夫の転勤で引越しの連続だったという話の中で「夫は、肩書きでその地方の社会にすんなり入っていくけれど、ついていった私は、自分が努力しなければ何も始まりませんでした」という前島さんの言葉が強く今井さんの心に刻まれた。

そしてその 2 年後、今井さん自身が夫の転勤で東京を離れることになる。名古屋に移転しての日々の中で、今井さんの耳にあの時の前島さん言葉が甦ってきた。「自分が努力しなければ何も始まらない」…今井さんは思い切って前島さんに手紙を書き、前島さんが辿ってきた人生の話聞かせて欲しいと申し出る。そうして実現したインタビューがもとになり、この本が誕生した。

「遠く旅しても、帰りつく故郷、雑司が谷が有りますことを幸いに存じます。」…本文扉ページの裏に記されている前島さんの言葉である。タイトルの舞台となっている雑司が谷は、大正から昭和にかけて開けたいわゆる新興住宅地のひとつである。新たな中産階級層の流入により、山の手とも下町とも異なる自由な気風が醸し出され、数多くの文化人が住んでいた。前島さんは大正 9 年生まれ、生後まもなくこの雑司が谷に移り、リベラルな両親とキリスト教的家庭観を身近に幼少時を過ごした。女の子は万事控えめにといった考え方が主流であった当時であって、「自分の考えをはっきり言う姿勢」を両親から躰けられ、また近くに宣教師館など外国人が住む環境の中で、「人を愛する」「社会に役立つことをする喜び」といったキリスト教的な倫理観が培われた。後に戦中・戦後の激動の時代、前島さんの人生もまた波乱万丈の展開をし、夫の転勤に伴って中国や日本各地へと、雑司が谷を離れて暮らす時期も多かった。しかし、現実的な住処である以上に、雑司が谷は前島さんにとって心の拠り所であった。時代や世間の風潮に囚われることなく、自分の考えに立って前向きに行動する基本的な精神のありようが育まれた地なのである。

軍国主義に染まっていく時代への反発から大学を中退して結婚、夫の赴任先である中国での暮らし、敗戦、身重の体での引き揚げ、その帰途の出産、そうした苦難を体験しつつも、前島さんは「時代が変わる」期待感を持って戦後を迎えた。

そして戦後、夫の転勤に伴って各地に移り住みながら、通信教育で幼稚園教諭の資格を得、後に雑司が谷の自宅を開放して保育園を開く。そんな地域と深く関わる生き方をする中で様々な人と出会い、その出会いがまた新たな活動につながっていく。

宣教師館の保存運動から地域誌の発行、平和を願っての活動にいたるまで、「多くの方に育てられて」と言う前島さんだが、80歳を迎えてなお前向きな情熱は衰えない。「私はこうありたい、社会的存在でありたい、という気持ちが強いですね」「(そういう思いを) やっとね、勇気を出して言えるようになりました」という控えめな言葉に込められた力強さに、前島さんの「雑司が谷魂」が宿っているようである。

本書は、そんな前島さんの生き方に惚れ込んだ著者が、前島さんの囚われない心を縦糸に、その人生の軌跡を横糸に紡ぎだしたライフストーリーであり、ひとりの女性をモデルにした現代史、女性史としても読める。聞き書きというスタイルをとってはいるが、本文を構成する大半は当時の時代背景や社会情勢を記す地の文である。著者の今井さんは、前島さんを取り巻く状況や関係する人々について丹念に調べ、その舞台背景をきっちり書き込んだ上で、主役の前島さんを登場させてくる。そしてその語り口そのままの前島さんの言葉は、時に茶目っ気にあふれた魅力的な女性の姿を浮かびあがらせ、また時には「私、一度も軍国乙女になったことがないんです」といった決然とした響きを持って読む者の耳に届いてくる。

ひたむきに生きてきた前島さんの生身の存在感が、読む者を勇気づけてくれる。著者である今井さんが、前島さんからもらったであろう元気の素をお裾分けしてくれる、そんな一冊である。

**詳細：今井洋子さん（著者）**

# 『雑司が谷物語 — 聞き書き・前島郁子ひと筋の道』

今井 洋子 著

1907（明治40）年に建てられた「雑司が谷旧宣教師館」の保存運動や1914（大正3）年に建てられた東京駅丸の内口の赤レンガの駅舎の保存運動に携わった前島郁子さん。小さな講座で前島郁子さんの生きかたに惚れ込んだ著者が2人の幼児を連れて押しかけ取材をして聞いた81年の魅力的な人生。

## 第1章 雑司が谷の幼い日々

女子大卒の母／雑司が谷というまち／関東大震災／父とクリスチャン・ホーム  
／宣教師マッケーレブ

## 第2章 軍国主義の時代の中で

息苦しい世の中／結婚／中国へ／中国の日本人／敗戦／集結／引き揚げ／貨物  
廠で出産

## 第3章 保育の仕事にチャレンジ

敗戦後の日本で／地方暮らしで通信教育／結核を乗り越えて／保育所開設まで  
／自宅で開いためぐみ保育園／さくらナースリーにて／保育の仕事をやめる／  
北京に行く

## 第4章 建物保存に奔走

旧宣教師館の危機／保存運動というものを知る／建設反対から建物保存へ／徳  
不孤／旧宣教師館が残った！／町並みゼミ／赤レンガの東京駅を愛する市民の  
会

## 第5章 雑司が谷から発信をつづける

『わがまち雑司が谷』と宣教師館のその後／海外ひとり旅／洗礼を受ける／小  
さな追悼会／北京女性会議に参加する／土木の文化財を考える会／死ぬまで前  
を向いて生きる

A5判      228      ページ  
制 作      都市出版  
価 格      1800円（税込み）